＜ 別　紙 ＞

第 38 回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「キミのカートをおして」　　**はるたけ　こはね（福島県）**

＜受賞理由＞

主人公の少年悠馬は、飼っている犬の老いを受け入れられず、クラスメイトが飼い始めた子犬に魅かれていくが、父親が幼い頃から家族として一緒に暮らしてきたその老いた犬を変わらぬ愛情をもって大切に面倒を見ている姿や行動から、次第に飼い犬の老いを理解して受け入れる物語。

ペットの高齢化に伴う問題をテーマにしており、高齢犬の様子とともに家族の一員として犬を受け入れて暮らす少年の優しい気持ちがはぐくまれ、成長していく様子が分かりやすく表現されている。ペットの老いをどのように受け入れていくか、最後まで責任をもってペットを飼う終生飼養について理解を深めることができる作品。

【日本動物児童文学優秀賞】

「いつか私の手のひらに」　　**丸山　湊（埼玉県）**

＜受賞理由＞

かわいさのあまり安易に飼うことを決めてしまう人も少なくないハムスター。主人公のさくらは簡単に飼えると思っていたが、そのことでクラスメイトから怒られてしまい、いろいろ調べてみるとハムスターは簡単に飼える動物ではないことがわかる。

動物の命や重さや価値は値段では決められない。動物を飼うということは愛情と覚悟をもって向き合うことであることを語りかける内容となっており、命の重さと飼育する責任について考えさせられる作品。

「小さな足あと」　　原口　賢治（京都府）

＜受賞理由＞
　主人公の美咲が理科の先生の助言を得ながらハクセキレイへの理解を深め、ハクセキレイと人との共生を考え学んでいく過程が丁寧にわかりやすく描かれている。
　日常生活の中で、学校や近所で普通に見られる生き物を題材とした、野鳥と人間が共存するための環境を考えさせられるストーリーの中で、野生動物を見守る意味と意義を学ぶことができる。
　「ルールは縛るものじゃない。一緒に生きるための約束なんだ。」という美咲の言葉は、読者が人と動物の共生を考えるうえでのきっかけや参考となるだろう。

【日本動物児童文学奨励賞】

「ネコまちがい」　　おーた　みか（愛知県）

＜受賞理由＞
　認知症を患っている佐伯るみさんは、主人公の竜空が飼っているテン（ネコ）を自分が飼っているリュウ（ネコ）とそっくりなため、リュウだと思い込んでしまう。竜空は「ネコまちがい」から始まる迷子ネコ探しによる地域の人々との出会い、交流を通して命の大切さの理解を深めていく。高齢者を思いやる心を育むとともにさくらネコという一代限りの命と命をつないでくことの大切さを学ぶことができる作品。

「モモちゃんはずっと同じ猫」　　藤川　陽子（大阪府）

＜受賞理由＞
　公園にいるネコのモモちゃんを主人公のめいがペットとして飼うかどうかを悩む過程で、母親との確執ともきちんと向き合い、自分の考えで話すことができるようになるなど、人として成長していく姿が描かれている。
　ペットとして迎えるためには「かわいい」と「かわいそう」だけではなく、命と向き合う責任を伝えて、その動物と人間との関わりについて学ぶことができる作品。

「水をかえる日」　　おおむら　さき（神奈川県）

＜受賞理由＞
　友達と仲良くなりたいために、動物と話せると嘘をつき続けてきた主人公のそよみが、嘘をついてきたことを後悔しながらも、同級生がお祭りで手に入れた金魚の世話を一緒

にすることになり、最後は嘘をついていたことを同級生に正直に打ち明けて本当の友情を得る。
　金魚の詳しい飼育方法の描写は、適正飼養を伝えている。ペットとの関わりを通じて主人公と周りの友達との新たな仲間意識が芽生え、協力して公園にいる子猫を助ける展開は、動物の持つ潜在的な力や可能性を感じる要素がある作品。

「ルミナスの瞳」　　里木　るい（東京都）

＜受賞理由＞
　不登校の拓斗が、事故で視力を失った競走馬・ルミナスとの出会いや触れ合い、飼育を通して、日々の生活や思考に変化が芽生え、成長していく物語。
　それまで動物と関わる経験がなかった拓斗が、ルミナスの世話を続けることで絆が生まれ、ルミナスが脱走して、橋の上で発見されたとき、拓斗の呼びかけにまるで拓斗の姿が見えるかのように橋を引き返してきたシーンでは、拓斗とルミナスの目には見えない絆を見事に表現している。
　掘り返した土の匂い等、情景描写が美しく、よどみのないストーリー展開は読後にあたたかい余韻を残す作品。。

「レオンとぼくの秘密の合図」　　神楽堂（北海道）

＜受賞理由＞
　内気でクラスの友達の前で話すことが苦手な少年ユウキが読書介助犬レオンと出会い、ハンドラーから教わったカーミングシグナル（読書介助犬が教えるしぐさ）のことを学ぶうちに、引っ込み思案の自分とレオンから出るシグナルを重ねて、次第に自分の言葉で表現できるようになっていく。
　読書介助犬とのふれあいを通じて育まれる、動物のぬくもり、命の尊さ、他者に静かに寄り添うことの大切さの気付きが期待される。
　犬への理解が主人公のユウキ自身だけでなく他者への理解にもつながっていくことが表現された全体的に優しさが感じられる作品。